
市立征辰中学校戦国サバイバルゲーム！

カイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

市立征辰中学校戦国サバイバルゲーム！

【Nコード】

N8719B

【作者名】

カイリ

【あらすじ】

大きな期待と少しの不安を抱えて入学した中学校は常識外れの『ゲーム』をしている学校だった。平和な何でもない学校生活を送りたいだけの水野梓はゲームに巻き込まれ？

第0週

第0週

『平凡な生活に飽々しているんだ。僕は非日常的な生活を送りたい。分かるかい？』

とある小説の主人公である少年の言葉だ。わたしは友達からの借り物であることを忘れ、思わずその本を床に投げつけた。

「ふざけんなあああ！ 平凡な生活ほど尊いものはないんだぞ！」

そつだ。わたしだって、楽しい学園生活を胸に思い描いて、アノ中学校に足を踏み入れたはずなのに。帰して欲しい。わたしの貴重な『普通』の中学校ライフを。

第1週 1 - 1

第1週

1

中学校の靴箱はやたら高い。一番上の段なんか、わたしの頭一個分ほど上に位置している。新入生の名前シールが貼ってあった。小学校は誕生日順だったけれど、中学校では名前の五十音順になっているみたいだ。

一年、五組。わたしのクラスカラーであるオレンジの名前シールを目で辿った。一クラスにつき、三十五人。六クラスあるから、結構な人数だ。

えーと、ミズノ、ミズノ……。

ぶつぶつと呟きながら名前を辿っていると、他の生徒もわたしと同じように首を上から下へ、丁寧に目を凝らしているのが見えた。あの子も、同じクラスなんだろうか。背がわたしよりも低くて、可愛い女の子だ。

「……あ、あった」

ミズノ・アズサ 水野梓。それがわたしの靴箱に貼られた名前シールの文字。運の良いことに、あまり高い場所ではなかった。よかった。小学校のときはクラスの背の順で後ろから三番目だったわたし。でもこのノッポな靴箱には背伸びしたって敵わない。一番上の段だったら、参ってしまう。

外靴を靴箱の中に入れて上靴を履く。真新しい上靴は、まだ少しだけ緩かった。

廊下を歩き出すと、壁のポスターがやたら目についた。風紀守・松本良平、家老筆頭・北篠美紀、勉学首席・川中波……。

何だ、これ。

部活の案内のようだけど、そうでもないようだ。そもそも『風紀守』って何て読むんだろう？ フウキシユ？ フウキマモル？ 意味が分からなかった。

ホームルームではまず、冊子が渡された。

『派閥体験にあたっての諸注意』

……何だ、これ。わたしは再び呟く。『派閥体験』というのは何なのだろう。他の生徒も状況が飲み込めていないようだ。教室の中が騒然とする。

「はいはいはい。席についてー。いろいろ説明するからねー」

上級生が入ってくる。にこにこ笑顔が印象的な眼鏡の男子。肩からかけたたすきには、松本良平とある。先程のポスターで、『風紀守』の肩書きと共にあった名前だ。

「はーいつ、僕の名前読める人」

完全に子供扱いだ。わたしは一瞬だけ眉をひそめた。もう中学生なのに、こんな扱いを受けて嬉しいはずがない。まるで気にならない子もいるみたいだけれど。

「まつもとりようへいー」

数人の男子が元気に答える。まだ小学生気分が抜けきっていないような、幼い声だ。それでも松本良平（先輩と言っべきだがあえて省略）は笑顔のまま。むしろ、嬉しそうに見える。

「はいっ、よくできましたあー。僕は我が校の風紀守ふうぎのかみを務めています。『良平先輩VV』って呼んでねー！」

軽くウインクをしよう松本良平。わたしの眉根の縦じわが、三本増しになる。

「はあーいー!!」

けれど素直に返事をする子がいた。それも、クラスの半分程の人数だ。返事をしなかった中にも、松本良平を嫌悪する様子はない。あの態度がどうしても癪に触るのは、わたしだけなのだろうか？
限りなく友好的な雰囲気が出る中、わたしは自問した。

「君達の中でも、まだ我が校の方針について知らない人は多いと思う。実際、生活してみないとこの異質さは分からないしね。

この学校は、全校を挙げてあるゲームをしているんだ。ゲームと言っても、生易しいものじゃない。でも中学校生活が充実すること、それは保証するよ」

松本良平はにつこりと笑う。

「ひと呼んで、『征辰戦国サバイバルゲーム』！！」

戦国サバイバルゲーム！？

教室の中に沈黙が広がる。これが漫画なら、疑問符で教室中が埋め尽されていただろう。そんな空気を、松本良平は楽しんでいるようだった。

「お決まりなりアクションだねえ。うん、素直で何より！」

言いながら頷いた松本良平は、いきなり、パンと手を叩いた。クラスが緊張する。教室のドアが開いて、二人の男女が入ってきた。

「お呼びですか、殿」

「うん、いろいろ説明するからそこにいて」

「御意」

男女は会釈をすると、ドアの側に控えた。まるで、松本良平の家来であるかのように。

「このゲームはね、学校全体がひとつの国だと考えていい。ひとつの大国の中にいくつかの小国があって、互いに競い合って暮らしている。

小学校の歴史で習ったかな、戦国時代？ 織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、武田信玄、上杉謙信、毛利元就、真田幸村、今川義元、伊達政宗……。他にもたくさんの武将がいたね。

君たち一人一人は、武将であると思ってほしい。原則的にはどんな立場をとるかはそれぞれ個人の自由だ。僕のように『殿』と呼ばれる派閥の頭になるのも構わない。その、美紀や波のように大きな派閥の一員になって過ごすのも構わない」

松本良平は控える男女　『波』と『美紀』を一瞥して言う。二人はわたしたちに向かって、軽くお辞儀をした。
松本良平は続ける。

「あと……、ごく少数だけどこの派閥にも入らず、競争を傍観している人や、派閥ではなくて友人たちと同盟を組んで助け合う人たちもいたかな。

基本的には本当に自由なんだ。だけどまあ君たちは、最初はどこか大きな派閥に加わっているのがいいと思うな。ゲームのルールも見えてくるし、　下剋上だって可能なんだ」

そこで、松本良平はにやりとした。横で、『波』と『美紀』も薄く笑っている。

「はいっ。下剋上の意味分かる人ー」

松本良平が教室を見回す。みんな目をそらした。誰かが答える気配はない。何とも気まずい雰囲気広がった。

「あれ？ 全滅？」

松本良平がすっとんきょうな声を出す。先程からの子供扱いといい、嫌味なやつだ。わたしはますます眉根を寄せた。

下剋上くらい、習ったつての。

「おう、そのショートカットの君。分かる？」

天井につくのではないかと思うくらい腕を伸ばして手を挙げたわたしを指名する。

「下剋上とは、身分が下の者が上の者を殺したり追放したりして地位を上げることです」

思いつきり睨みつけながら言うと、松本良平はにっこりと笑った。

「よくできました。まあゲームだから、殺したり追放したりなんて物騒なことはいらないけどね。このゲームの中での下剋上は自分の努力にかかっている。テストで上位の成績をとったり、部活の大会で賞をとったり……。優れていればいるほど、派閥の力は強まり、派閥の中でもものしあがれる。ちなみに僕もそのクチさっ！！」

松本良平の言葉に、クラスの何人かが

「おおーっ」と歓声を上げる。何だか、皆やる気満々だ。松本良平の話を目を輝かせて聴く隣の席の男子。わたしは小さく溜め息をついた。

「その冊子にある通り、派閥には仮入会できる。派閥によっていろいろなカラーがあるから、自分に合うところを探してみてはどうか。期間は二週間だから、じっくり決められると思う。君たちの学園生活がよいものになるように祈っているよ」

松本良平はそう言い、笑う。それとほぼ同時、チャイムが鳴り響いた。

わたしは席を立って教室を出た。

「君、名前は？」

背後から呼び止められて振り返ると、松本良平の笑顔があった。思わず、逃げ出しそうになる。

「はい？」

「名前。さっき発表してくれたよね？」

「……水野です」

「下の名前は？」

「梓、ですけど……」

何なんだ、この人は。にこにこと笑う顔が、あまりに害意を含んでいないのが怖い。

「水野梓、ねえ。覚えておくよ」

いえ、結構です。

そう言いそうになるのを危うく飲み込んで、わたしは曖昧に頷いた。松本良平はフツと意味ありげな表情を浮かべる。けれどすぐに笑顔に戻って、

「波」と

「美紀」を従えて廊下を歩いて行った。

.

2

わたしの小学校の卒業生は、普通二つの進路の中からどちらかを選択する。

わたしの選んだ、^{せいしん}征辰中学校。
その他大勢の選んだ、^{こうわ}弘和中学校。

そもそもわたしが征辰に行くと言ったときの、親友たちの微妙な態度でおかしいと気付くべきだったんだ。

『 え、あず征辰に行くの？ 』

『 うん。だってあたしの住んでるとこだと弘和は学区外だし。……
奈都と葵は弘和なんだよね？ 』

『 いや、あたし達だけじゃなくてほとんどみんな弘和……だけど……
……？ 』

『 へえー。学区外は受験もあるのに、大変だねえ 』
『 ああー、うん。そう……だよな？ 』

今思えば明らかに不自然なのに。わたしが馬鹿だったのか？……
けど、征辰がこういう学校なら、誰か教えてくれてもよさそうなものだ。

薄情者たちめ。

溜め息と共に胸中で毒づいた。

「水野梓」

名を呼ばれて我に返る。そういえば、入学式の最中だった。

「はい」

返事して起立すると、見晴らしがよくなった。黒い頭がいっぱいある。

ふつと体育館の壁の方に視線を移すと、見覚えのある顔を見つけた。

松本良平だ。

相変わらずの笑顔で、茶髪の男子と話をしている。その男子も松本良平同様肩からたすきをかけている。他にも七、八人ほどたすきをかけている生徒が壁の方に並んでいた。あれが『殿』たちなんだろう。

わたしは視線を正面に戻して着席した。

「ねえねえ」

「……はい？」

右隣を見ると、朝靴箱で見た女の子がわたしを見ていた。

「あたし、西城真唯^{さいじょうまゆい}。えっと、『下剋上』の人だよね？」

真唯ちゃんは言うつと、上目使いにわたしを見る。

妙な覚えられ方だなあ。

思わず、苦笑した。

「うん。わたしは、水野梓。小学校では、『あず』って呼ばれてた」

「じゃあ、あたしもあずって呼んでいい？」

「いいよ」

わたしが快諾すると、真唯ちゃんは笑顔になった。まるで小さな花

のような、可愛い笑みだった。

.

「生徒会長からのあいさつ」

司会の声がふいに響く。わたしはステージの方に目を向けた。

登壇してくる長髪の男子生徒。まるで女の子のように美人さんだ。

「うわぁー綺麗なひとー！」

「生徒会長、春日井廉士^{かすがいれんし}。征辰の中で、いちばん大きな派閥のリーダーなんだよ」

真唯ちゃんが解説してくれた。

「詳しいんだね？」

「うん。うちの兄貴がこの卒業生でさ。生徒会長は、大抵いちばん有力な武将になるんだって」

「へえーっ」

わたしは再び生徒会長に目を移した。柔らかな微笑を浮かべてあいさつを述べる姿が目優しい。あんなに繊細そうな人が一番有力な『武将』だなんて、信じ難い話だ。

「それじゃあ、明日は実力テストだからな。しっかり勉強してこいよ。あと、弁当を忘れないように！」

「きりーっ！ 注目、さようなら」

「さようならぁーっ」

小学校の時と何ら変わらないあいさつに、ほっとする。

中学校はどんなに恐ろしいところかと思っていたが、それほどでもない。今日一日で実感した。……といっても、まだ何をしたわけではないのだけれど。

ただし突然の実力テストには閉口してしまう。今日の放課後だけで
小学校の全範囲の復習をしろ、とはなかなかの宿題だ。

「最悪ーっ。テストなんて聞いてないよお」

真唯ちゃんが嘆きながら溜め息をつく。

「このテストもゲームの内容なのかなア」

「多分ね。あーもうっ横暴だよー」

わたしは苦笑したけれど、気分は真唯ちゃん並に最悪だった。

「やつちまったあ……」

返ってきたテストの回答を見て、わたしは硬直した。
100点、97点、99点、100点、97点。
自分のものとは思えない点数に心臓が早鐘をうつ。

何なんだ、この超人的な点数は？

「あずー！。どうだった？」

「あ……うん。結構よかったかな？ 真唯ちゃんは？ どうだった？」

「うーん。まあ思ったほど悪くなかったけどね。それにしてもヤバイわ」

溜め息をつく真唯ちゃん。わたしは持っていた答案を裏返して、机の中に突っ込む。隠すことでもないような気がするけれど、反射的に体が動いてしまった。

「ねえ、今日派閥体験行かない？ 良平先輩も、最初は派閥に入ってた方がいいって言ってたじゃん？」

良平先輩、だって。いい子だなあ、真唯ちゃんは。松本良平のことをきちんと名前で呼んでやっているんだ。

わたしは胸中で呟きながら、松本良平の顔を思い浮かべた。苦手なタイプではないけれど、どうにも好きになれない性格なのだ。

松本良平の派閥には入らないぞと強く誓う。

「真唯ちゃんは、どこか行きたい派閥とかあるの？」
問うと、真唯ちゃんは少し恥ずかしそうに目をふせた。
「うん。……良平先輩のところ、行ってもいいかな？」

……マジですか。

わたしは自分の顔が引きつるのを感じた。

二年三組。

敵は間違はなくこの中にいる。一瞬の隙が命取りになる、過酷な試験になるだろう。何としてでも、生き延びねばならない。

なんて。わたしは心なしか嬉しそうな真唯ちゃんを見ながら息をついた。

松本良平の態度が気に入らなかったからと言って、毛嫌するほどでもないのだ。あちらが、わたしに害意を抱いているわけでもない。きっと、周りが知らない人ばかりだから、ちょっとばかり過剰になっているに違いない。

「失礼しまーす」

教室の中には、十数人の生徒がいた。昼休みだというせいもあってか、その人たちは学年関係なく楽しそうに会話している。

「おー、体験者だ！」

そう言って男子生徒がこちらに歩いてくる。わたしは真唯ちゃんと

顔を見合わせた。なぜって、その生徒は松本良平の部下の、『波』と呼ばれていた人だったから。

「あれ？ 君たち一年五組の子だよね？」

『波』がわたしと真唯ちゃんの顔を見比べて言う。

「あ、はい」

「わあー来てくれたんだあ。ありがとう！」

『波』は笑顔になる。何だか、可愛い人だ。

「御家老ーっ。一年五組の人きたよー」

『波』は黒板の前にいる女子のグループに手を振った。女子生徒の一人がこちらに歩いてくる。

「御家老？」

わたしと真唯ちゃんは顔を見合わせた。分かる？ と目で問いかけられる。わたしは首を横に振った。

「ああ、御家老つてのは派閥の中で二番目に偉い人を言うんだ。うちの御家老は、北篠美紀。ちなみにオレは、勉学主席の川中波。派閥の中でいちばん頭いいんだぜ」

言っと、波先輩は御家老を振り返り、

「ねーっ」と同意を求めた。

「ええっと、水野さんと……」

御家老は波先輩の言葉をすっきり無視して、わたしと真唯ちゃんを見比べる。

「西城真唯です」

真唯ちゃんが応える。

「水野さんと西城さん、ようこそ。 今、殿は会議に行っていないんだけど……すぐ戻ってくると思うよ。中に入って待ってる？」

美紀先輩が微笑む。わたしと真唯ちゃんは素直に頷いた。

「おっ、水野梓！ 体験に来てたのか」

その時廊下の向こう側から声がする。見ると、そこに立っていたのは紛れもなく 松本良平だった。真唯ちゃんが笑顔になったの

に對し、わたしは思わず後ずさる。

「殿、お帰りなさいませ」

「良平ー、會議どうだったあー？」

会釈する美紀先輩と、手を振る波先輩。「殿」だからといって、必ずしも礼儀正しくしなくてはならないわけではないようだ。

「おう。波を勉学主席から引きずり落とすやつが出るかもしれん」
松本良平は不敵に笑いながら言った。

「まっさかあ。オレを引きずり下ろせるのは常にテストで480以上取ってるやつだけだよ？　うちの学年には、480以上取ったところあるやつなんてオレしかないじゃん？」

「一年にいるんだよ。　なあ、天才少女」

松本良平がわたしの方を見て笑う。波先輩と真唯ちゃんが驚愕の声を上げて振り返った。美紀先輩は拍手している。

わたしは　　頭の中が真っ白になった。突然話を振ってきた松本良平は、わたしの点数を知っているのだろうか？　誰にも言っていないのに？　と、言うか知っているはずがない。松本良平は変なやつだけれど、超能力者ではないんだから。

わたしは自分で自分に言い聞かせた。

「……そう、なんですか？　しりませんでした」
しらばっくれてやる。

松本良平は一瞬きょとんとしたけれど、すぐに笑顔になった。

「それならば教えてしんぜよう。今回493点を取った者の名を！」

「493!？」

波先輩と真唯ちゃんがすつとんきょうな声を揃える。この二人、相性ぴったりみたいだ。でも、わたしはそれどころじゃない。松本良平は、わたしの点数を本当に知っているようだ。わたしはまた、頭の中が真っ白になる。

「そいつは、み

」

.

「水野梓はいるかあああつ」
怒号。

わたしは声のする方を慌てて振り返った。

そんな大声で呼ばれてしまうようなことをしたっけ？

思わず自分に問う。……でも、そんなことしているはずがない。まだ入学して3日だ。小学校のころは男子とけんかして泣かせたこともあったけれど、入学してからはまだ誰かに危害を加えるようなことはしていない。

立っていたのは、多分校則破りの茶髪をした男子生徒。いかにも『不良』しているお兄さんだ。

「大翔^{ひろと}オ。うるさいぞ。一年がおびえる」

「るせつ。水野梓がてめえのところにいるって聞いたぞ！ 出せやコラア」

松本良平になぐりかかりそうな勢いでその不良は言う。乱れた服装のわりにちゃんとネームプレート^{あさか}を胸につけている。ネームプレートには、『朝霞大翔』とあった。

「あ……あの……、水野梓はわたしですけど」

おずおずと手を挙げて言っていると、朝霞はずんずんとこちらに歩いてきた。わたしより1、20センチメートル高い長身で、思いきりわたしを見下ろす朝霞。……いや、見下ろすというよりは見下されている感がある。

「おう、お前か。ちょっとついてこい」

「……な……何ですか？」

わたしは思わず後ずさる。　かなり怖い。

「朝霞あああつここで会ったが百年目だあつ!!」

波先輩が突然、手近にあった机を投げつける。机の中の教科書がおちた。

可哀想に、誰の机だろう……なんて、それどころじゃない。

波先輩が机を投げつけた相手はもちろん朝霞大翔だ。ということは、朝霞のすぐ隣に立つわたしも危険というわけだ。

「きやあつ」

思わず目を閉じる。でも、机はわたしまで届かなかった。かわりにバーン、ガシャーッと派手な音が響く。

恐る恐る目を開けると、教室の窓に突き刺さった机が目に入る。朝霞が蹴り飛ばしたらしい。

「サッカー部のキック力なめんなよ、川中ア。てめえうざい。消えろ。死ね」

突然机を投げつける波先輩も波先輩だけど、朝霞も朝霞だ。窓ガラスをどうするのだろう。いやそれよりも、わたしの存在をまるきり無視してけんかするのはやめてほしい。心臓ではまだ大太鼓が鳴っていた。

「あーもう、仕事増えた。オレは責任持たんぞ。レンにはお前から説明しろい」

松本良平がさじを投げる。美紀先輩は松本良平に従うようだ。

「いや、今のは全面的に川中が悪いだろ。つーことで水野梓は借りてくぞ」

「なっ、そんな、勝手に……!!」

わたしが言っただけで、朝霞は聞く耳持たない。わたしの腕を引っ張って歩き出した。

「水野オーこの子はこっちで預かっておくぞ」

松本良平が手を振る。真唯ちゃんは何故か笑顔で松本良平を見つめている。

いい気なものだ。

わたしは朝霞大翔に腕を掴まれたままどこかに連行されていくというのに。

4

「まあ入れ」

入れというわりに依然腕を掴んだままの朝霞。わたしに有無を言わず椅子を差し出す。わたしは素直に椅子に腰掛けた。朝霞もわたしの正面に椅子を持ってきて座る。

「単刀直入に言おう」

朝霞が真顔になる。凄まれるのも怖い、真顔も真顔で怖い。わたしは朝霞大翔のオーラのようなものに圧倒されっぱなしのような気がした。

「俺の派閥に入れ」

「イヤです」

ええっ?! マジで?

反射的に答えてからわたしは自分に聞き返す。

「何故断わる?」

朝霞が不機嫌そうな表情をした。何故、と言われても困ってしまう。
「わたしがどこの派閥に入るかはわたしが決めます。松本良平……先輩も派閥によってカラーがあるって言うていたし、わたしはわたしに合う派閥を探します」

「お前、良平のトコロに入るのか?」

「入りません。……あそこだけは、絶対に」

わたしは力強く首を横に振って答えた。朝霞が少し表情を和らげた。

「それなら、ひとまず安心だな。
つきり表現するやつだな」

水野梓、お前自分の意思をは

「黙っていたら自分の思っていたことと違っていたりするじゃない
ですか。そういうの、嫌いなんです」

わたしは朝霞の顔を初めて正視した。こうして見ると、わりと整っ
た顔立ちをしている。

なんだ、結構かつこいいじゃん。

だけど、ときめいたりなんかしていない。ときめくには、あまりに
酷すぎる初対面だったもの。

「お前の意見が聞きてえ」

不意に朝霞が口を開く。

「はい？」

思わず構えて聞き返すが、朝霞は気にもせず続けた。

「俺の派閥に入りたがる一年が少ねえ。……つか、体験にすら来ねえし。はつきり言つて、存亡の危機だ。水野、お前俺んとこどう思う？」

そりゃ怖いからなあ。

うつかり思つたままを口にしかけて、わたしは思案顔をつくる。

否、考えるまでもなく理由は明白だ。恐らく朝霞のガラの悪さに怯えている一年生が多いのだ。わたしだって怖い。出来るならばお近づきにはなりたくないし、一刻も早く逃げ出たくて仕方がないのだ。

でも、そんなこといったら朝霞大翔は逆ギレしそうだ。

「正直なところを聞きてえ。キレたりしないから、本音言えよ」

葛藤するわたしに気付いたのか、朝霞はふうと溜め息をついた。観念するしかないようだ。

「……あの、すごく怖いです」

「怖い？」

「たぶん、その……茶髪とかが……近寄り難いっていうか……」

眉尻を上げた朝霞にしどろもどろになって言う。

嫌な汗が出た。心臓が高鳴る。わたし、無事にここから帰れるのだろうか？

ふとそんな疑問が頭の中を駆け抜ける。

「この髪は地だ」

わたしの心配をよそに、朝霞は不機嫌そうな顔をしたものの声音はそのまま答えた。少し意外だ。

「他に何かねえのか」

「うーんと、……やっぱり松本良平……先輩とか、生徒会長さんとかと比べて印象が……」

「悪いかな？」

「悪いっていうか……入学したての一年生には強烈かなあ、と……」

あえて強烈、と言葉を変えて言ったのは細やかな自己防衛措置だ。

もう遅い気もするが。

「俺には良平のようなことはできねえ。そもそも、お前なら年下のやつらに媚びるようなことができるか？」

「……いや、媚びるってちょっと違うと思いますけど」

真顔で問われたけれど何処かズレている。

不器用な人だ。

「でも、松本良平のマネをする必要はないと思います。……ちょっと怖い感じが、先輩の特徴だと思いますし」

とても誉め言葉とは捉えがたい言葉だったが、朝霞は照れ臭そうに、そうかと笑った。

この素直なところを知れば他の一年生も朝霞を恐れなくなるのではないだろうか。そう思ったけれど、一方でまだ目の前の『武将』に恐怖を抱いている自分にも、わたしはまた気付いていた。

とりあえず、怒らせないに越したことはない。

「あの……頑張って、くださいね」

「サンキューな。カリは、必ず返す」

ニツと、朝霞はとろける笑顔で言う。女殺しの笑顔だ。

第2週 1 - 1

第2週

1

五月に行われる体育大会で、わたしは借り物競走に出場することになった。借り物競走といってもただ物を借りるだけではない。途中に縄跳びあり、綱くぐりあり、フラフープ回しあり……と、障害物競走も兼ねているのだ。ちなみに、松本良平の傘下に入った真唯ちゃんも一緒だ。

クラス競技は長縄とびだ。その他派閥ごとの競技に、騎馬戦があるらしい。

「真唯ちゃんは騎馬戦出るの？ 松本良平担いで？」

わたしは一時間目の授業の用意をしながら答えた。

「良平先輩を担ぐのは2、3年生だよ。派閥の威信を賭けた対抗戦だからねエ」

真唯ちゃんは肩をすくめて笑う。でも、いかにも残念そうな表情なのだ。わたしなら、松本良平を担ぐくらいなら自分が騎乗したほうが余程マシだと思ってしまうのだが。

「あずは結局どこにも派閥に入らなかったの？」

「んー。なんか入りそびれちゃったかなあ。でも最初からどこにも入らないつもりだったんだけど」

「じゃあ、自分の派閥作るの？」

「まさか。ゲームに参加しないつもりだったこと。面倒臭くって肩をすくめながら言って、わたしは立ち上がった。」

「あずって、真面目なのか不真面目なのかよく分からないよね」

真唯ちゃんが苦笑する。わたしは口を尖らせて言い返した。

「それは、学校の方だよ。学校ぐるみでゲームしてるんだから」「そうだけどさ。あたしはこういうの好きだな。なんか楽しいし」

真唯ちゃんは、松本良平の派閥だもんねエ。

幸せそうな真唯ちゃんを尻目にわたしは深い溜め息をつく。真唯ちゃんが松本良平に並々ならない好意を抱いているのは火を見るより明らかだ。普通なら好きな人って分からないように隠さないか、とは思う。可愛いので構わないが。

好きな人と同じ派閥で一緒にいられるのなら、さぞかし楽しいだろう。

「あずもさあ、一緒に良平先輩のとこ入ればよかったのに」

惜しそうに言う真唯ちゃんに、わたしは激しく首を振った。

「それは勘弁！」

「良平先輩、いい人だよ？」

「それは分かるんだけどねえ……………」

わたしは渋い顔をした。

彼が悪い人間でないことは分かっている。人当たりがよくて、優しく、勉強もそこそこできて。わたしに対する態度に悪意が感じられるわけでもない。それなのに彼にかけらの好意も感じることができないのは、やはり第一印象の問題なのだろうか。

ああ、あたしって結構根に持つタイプだったんだ。

そんなことを考え、再び溜め息をつく。

「水野オー。いるかあ？」

何てことだ。

噂をすれば何とやら。教室の前のドアから教室を覗きこんで私の名を読んだ二年生は、教室の中を見渡す。

「……………真唯ちゃん、あたしちよつと旅に出てくるから！ よろしく！」

「え？ どこいくのー？」

目を丸くして訊いてくる真唯ちゃんに手を振って、私はこそこそと教室の後ろのドアに向かう。

この一週間、松本良平に関わって、ロクなことがなかった。一日の始まりから彼に関わるのはごめんだ。

「何やってるんだ、お前？」

低く屈んだ私の目の前にある制服の足。私の頭の上に降ってくる、少し呆れたような声。

はつと顔を上げると、制服を着崩した茶髪の二年生、
大翔と目があう。朝霞

敵は一人じゃなかったか……………っ！！

教室の前に松本良平、後ろに朝霞。万事急須というやつだ。

「あ、あの、ちょっとあたしお腹が痛くて……………」

「……嘘つけ。今までピンピンしてたろ」

朝霞は私の苦し紛れの言い訳を一蹴し、松本良平を呼ぶ。

「お、ここにいたのか水野」

「いえこれから保健室に行く予定ですので」

私は具合が悪そうに見えるように腹を押さえながら言う。

松本良平は私の顔を覗きこもうと少し体を屈める。私は反射的に顔をそらした。

「……………んー、大丈夫そうだな」

松本良平はサラリと言い、ついて来い、と私を促す。私としてはついていく気はさらさらないのだが、朝霞に腕を掴まれているので、ついて行かざるを得ない。

まったく、入学して2週間と経っていないのに、こうして連行されるのは一体何度目だろう。

ああ、何だか本当にお腹が痛くなってきた。

わたしが連行されてきたのは、例によって生徒会室である。『コ』の字形に並べられた長机に各『武将』たちが着席していた。壮観。足がすくむわたしを残して、松本良平と朝霞も空いている席につく。

沈黙。

始業を告げるチャイムが鳴るが、彼は教室に戻る素振りすら見せない。

一時間目は歴史だ。わたしは何より歴史の授業が好きなのだ。けれどこの雰囲気で『教室に戻りたい』なんて切り出せるはずがなかった。

ああ……さようなら金印……卑弥呼……銅鏡……

そもそも、わたしが今ここで立たされている理由が分からない。入学してからというものの、先輩に呼び出されてばかりだ。わたしは、ただ普通に生活しているだけなのに。

なんだか、泣きたくなってきた。

「呼び出して悪いね。派閥届けを出していない一年生に、今後どうするのか聞いていたんだ」

机の中心、上座に腰を下ろした二年生が口を開く。生徒会長春日井廉士。穏やかな笑みを浮かべた顔でこちらを見る彼は、しかし至極真面目な口調が、ますますわたしを怖じ気付けせる。

「一年五組、水野梓ちゃん　派閥届け出してないよね」

「……は、はい」

「それは単なる出し忘れ？ それとも、まだ迷っているのかな」

笑顔で理由を求められると、答えない訳にはいかない。 と、

言うより答えなければ授業に戻れないような気が、した。

美人だがその分笑顔に迫力がある。朝霞とはまた違った威圧感に、わたしは観念せざるを得なかった。

「出し忘れでも、迷ってるわけでも、ないです。……あの、わたし、ゲームに参加する気はないので……」

しどろもどろになって答えると、春日井はフと隣に座る松本良平と視線を交した。松本良平は苦笑とも微笑ともつかない表情で肩をすくめる。

何なのかイマイチ状況がつかめないが、どうも腹立たしさが込み上げてきた。わたしは二人を思いきりにらみつけて次の言葉を待った。

「もったいないね 君がゲームに参加すれば、おもしろい展開になると思うのだけど」

「あたしは学校に、ゲームをしに来ているわけじゃありません。……少なくともこうして授業時間にまで食い込んだ話し合いや、おもしろい人の成績を勝手に漏らす会議には賛同するつもりもありません」

それだけ一気にまくしたてると、わたしは息について『武将』たちを見回した。

朝霞と目があう。不良の図書守は口端を持ち上げて見せた。何だか少しだけ、勇気が湧いたような感覚を覚えたのが不思議だ。

「なるほどな」

春日井はふうと息をついて再びわたしの方をみた。

「じゃあ梓ちゃんは一匹狼、の方針で」

「……どっちかっていうと狼より猫っぽいけど」

会長の言葉に風紀守が呟くと、座には失笑がこぼれた。

わたしは何とも言えない複雑な気分で立ち尽くす。

あたしは狼でもなければ猫でもないんだけど。

惘然と胸中で呟いていると、今度は春日井と目があつた。

「悪かったね、もう教室に戻ってもいいよ」

「はい。……失礼します」

「あ、梓ちゃん。放課後、また来てくれる、此処に？」

会釈して生徒会室を出ようとしたわたしは、春日井の穏やかにも容赦ない言葉に、硬直してしまった。

あとで、保健室に胃薬もらいに行こ……………。

わたしは制服の上から胃に手を当てると、そう心に誓った。

「あーっもう、最悪！！！」

教室に戻ったわたしは、机に拳を思いきり叩き付けて叫んだ。真唯ちゃんが目を丸くして歩み寄ってくる。

「どうしたの？ 結局さっきの時間帰って来なかったね」

「派閥に入らないのかって！」

「それで？ 入ることにしたの？」

問われ、わたしは冗談じゃないと憤慨しながらジャージに着替えしていく。

「まあまあ落ち着いて。……でも、あずってなんか大物だよねえ」

真唯ちゃんの言葉に思わず笑って彼女を小付くと、真唯ちゃんも一緒に笑顔になった。

校庭に出ていくと、その中心近くで学級委員が声を張り上げていた。確か女子は伊藤亜衣香ちゃん、男子は………橋田なんとか君って言うんだ。まだ、クラス全員の名前を覚えているわけではない。「早く並べよーっ他のクラスはもう練習してるだろおっ！」

橋田くんの声に、わたしと真唯ちゃんは小走りになった。数人のクラスの男子の横を通る。追い越しま、その言葉が耳についた。「たりいーっ。何でクラス競技なんてあるんだよ」

「つうかさ、他の派閥のやつと協力する意味とかなくね？」

黙って練習できないのかなアこいつらは

わたしはその男子たちに一瞥くれてやりながら、心の中で呟いた。こついう、自分は何もせずに文句ばかり言っている人間はわたしが苦手とするタイプだ。いや、苦手というよりも、嫌悪感が先立つ。小学校の時もそういう男子を何人か『やつつけた』ことがあった。

「あず、どうしたのー？ 顔怖いよー？」

「それにしてもさあ、あいつら」

「誰？」

「いま文句言ってたやつら。ああいうの、あたし大嫌いなんだよねー。見ててむかつくー」

今度は真唯ちゃんが顔をしかめる。わたしは、目を丸くした。何だか、嬉しい。本当に真唯ちゃんはいいい子だな 思わず、わたしは真唯ちゃんに抱きついた。

「わっ？ どうしたの？」

「真唯ちゃんさいこーっ」

「誉めても何にも出ないよ」

胸を張る真唯ちゃん。わたしたちは声を立てて笑った。

わたしと真唯ちゃんは長縄の列の中に入る。

「じゃあ行くぞー。せえのー！」

橋田くんの掛け声。クラスの何人かがそれにあわせた。

「せえーで！ いー……ち……？」

数える声は尻すばみになった。ピンツと縄が張る。ふつと縄の中心の方を見ると、さつき文句を言っていた男子たちがにやにやと笑っているのが見えた。

「どんまいどんまい！ もう一回行くぞ！」

わたしは、その男子たちの方を向いたまま跳ぶ体勢をとる。

「せえーの、」

「せえーで！ い……っ」

再び。今度も誰か飛べていない人 否、飛んでいない人がいた。

それが誰かは、言うまでもない。

わたしはその男子たちの側まで歩み寄った。そいつらは

「なんだこいつ、」と言うような顔を向けてくる。なんだこいつ、

はお前らのほうだ。

「西山くん」

「いや、東山だから」

わたしが睨んだ一番背の高い男子 西山、もとい東山は、律儀に訂正をいれる。でも、彼が東だろうと西だろうとわたしには関係ない。

「それはどうでもいいけど

ちゃんと跳びなよ」

「はあ？ 跳んでるから」

東山が顔をしかめる。橋田くんや真唯ちゃんがわたしの横に来て、わたしと東山とを見くらべた。

「あず……？」

「今、跳んでなかったじゃん。何が気に入らないのか知らないけど、いい加減にしてくれない？」

「人のせいにすんなよ。お前がひっかかんてんじゃねえの？」

東山の言葉に、他の男子たちが笑いだす。

「はいはい。言ってれば？ この、低レベル」

わたしは彼らにそう吐き捨てる。東山が絶句し、今度は真唯ちゃんや橋田くんが笑い出す番だ。

.

「よし、もう一回行くぞー」

せーの、と殊更明るい声。クラスの声がそれに続く。

「せえー……………で……………」

やはり、かけ声は続かない。わたしは即座に東山を振り返る。

そこには、嘲笑。

黒いスニーカーに踏まれた縄。

わたしは、ゆっくりと何か抑え難いものが腹の中で渦巻いているような錯覚を受けた。

ああ、また、蛇が動き出した、

わたしはこの、怒りとも不甲斐なさともつかない感情を『蛇』と呼んでいる。『蛇』がかま首をもたげた時、わたしはどうにも理性による抑えがきかなくなってしまうのだ。最近はそのこともなかった。だからずっと眠ったままの『蛇』が起き出したとき、私自信何をしでかすか分かったものじゃない。

「……………誰か、縄踏んでるぞー。足どけてー」

橋田くんの気丈な声。他のクラスは10回、20回と着実に回数を重ねている。

縄系の橋田くんが力一杯腕を回すが、縄は地面からほとんど離れることなく張った。

「誰だよー、踏んでるの!」

東山が笑いながら言う。

のそり。

『蛇』が、首を上げた。そう自覚したときには、わたしの体は東山の方へ向かっていた。

「何だよ。学年一位」

嫌味つたらしい声。わたしは東山の顔を見ずに視線を地面に落とした。縄を踏んでいる足を一瞥。そのまま視線を上へと移動する。

「……足、どけなよ」

わたしは言いながら東山の向こう脛を思いきり蹴った。

「……ってえ！ 何しやがるっ」

「何しやがるはテメエの方だろうが！ 中学生にもなって、他人に迷惑かけてんじゃねーよっ」

クラスが啞然とする。東山なんかは、ぱしぱしと忙しく目をしばたいてわたしを見ていた。

「……お前、何したか分かってんのか！ オレは朝霞さんの配下だぜ」

「だから何よ。朝霞も大変だなあ、あんたみたいなやつが派閥にいて！」

「な……んだと……ッ」

「聞こえなかったんならもう一回言つてやるよ！ あんたみたいな自分のことしか考えられないやつらがいるから朝霞は要らん苦労をするんだ！ どこかの派閥に入ってるんなら尚更、クラスに協力しなさいよ！ 文句ばかり言つて何もしないお前は幼稚園児以下だ！……」

一気にまくし立てた。東山が反論できずにわたしを睨むけれど、また蹴られると思ったのか、情けないへっぴり腰になっている。ちょうどその時、チャイムが鳴り響いた。

「じゃあ、10分休憩ー。チャイムが鳴ったら、個人競技の練習だからな」

橋田くんが言うと、列は崩れる。わたしは真唯ちゃんと一緒に水飲み場へ歩いた。

「……やつちやったあーっ」

深い溜め息と共に漏らすと、真唯ちゃんは労うように肩を叩く。
「かつこよかったよー。あずでもキレルんだあ、ってちよつと意外」
「あんなの日常茶飯事ですよ。でも中学生になったらおとなしくしてようって、思ってたのに……あんの東山め……」
わたしは毒を吐くように言う。でも、半分くらいは照れ隠しだった。

「でもさー、東山最近調子のったから。イイ薬なんじゃない？」
真唯ちゃんが校庭の方を眺めながら肩をすくめる。次の時間は、一・二年生合同でやるらしい。松本良平や朝霞大翔の姿があった。

借り物競争の中に、ゴミ袋ジャンプという競技がある。その名の通り、ゴミ袋に両足をつ込んで、ひたすらジャンプするという何とも体力を浪費するものだ。

体力をやたら使うだけではない。これがなかなか難しいのだ。

ゴミ袋ジャンプで50メートルなんて冗談じゃない。わたしは1メートルも進んでいなかった。でも、真唯ちゃんは得意なようだ。遙か彼方を飛び跳ねている。

「何で……こんな競技が……っ 借り物競争に……っ あるのさ……ッ
！」

息も絶え絶えに文句を言うと、またこけた。七転八倒状態だ。

あー、もう。馬鹿馬鹿しい……。

溜め息をつきながら呟く。もう起き上がるのも面倒くさい。そうも言ってられないので立ち上がる。

背後で笑い声。東山だ。さんざ恥をかかされたものだから、わたしのこの姿は、愉快でたまらないらしい。

うつむいて歯を食いしばると、わたしはまた跳んだ。

ちくしょう……っ。わたしだって、好きで転んでるんじゃないや。いやいつ。

普段の運動不足が祟って膝から下がだるい。感覚がなくなりそう
だ。……。

「あッ」

バランスが崩れる。どうして、こんなものが出来ないのだろう。
頭ではどうすればいいか分かっているのに、体が動いてくれない。

「っ……あっ、」

不意に、腕が掴まれる。ボキボキッ、と肩が派手な音をたてた。

「さっきから見てたけど、お前、運動神経二ブイなあー」

呆れた声。

わたしは地面に膝と片手をついて、声のした方をみた。

「朝霞先輩……、」

茶色い髪が太陽に透けてより赤い。学校指定のＴシャツをこの人
が着るはずがないが、今まとっている黒いＴシャツはどうかと思う。
青春ドラマのヒーローみたいな行動をとった不良を呆然と見つめ
ながら、わたしの頭はせわしく回転していた。

相変わらずやることが極端な人だなあ。こんな黒いＴシャツ
を着ていて怒られないのかな？ ああ、でも武将だし……、怖いし
ね……。

あれ、今朝霞はわたしを助けてくれたの？ いや、でもすごく気
に障ることを言われたような……。……。

「……何してるんですか？」

.

眉根を寄せて尋ねる。朝霞はもう一方の手を差し出してわたしを立たせながら渋い顔をした。

「そりやないだろ。イモムシみたいになってるお前に手エ貸してやるうと思つてわざわざここまで出向いてやったのに」

「イモムシ……？」

「よしつ。この前のカリを返す」

わたしが返そうとした言葉は、朝霞の元気な声にかき消された。わたしは溜め息をついて、即座に首を横に振る。朝霞がしかめつづらになってにらんできたが、前言撤回のつもりはない。

東山たちの目がある中で朝霞に助けてもらうのは何故か癪だったのだ。気恥ずかしい感じもする。そもそも、わたしは朝霞の派閥の人間ではない。気にかけてくれるのは嬉しいけれど、本来なら敵同士なのだ。もつとも、わたしはゲームに参加するつもりなんてない。と心に誓っているのだけれど。

「先輩も、まだ授業中でしょう？ わたしは平気です先輩はちゃんと授業に出てください」

「まったく……真面目だな、あんたは。疲れねえの？」

「真面目といわれても………これが地ですから」
わたしは肩をすくめて見せた。

「まあいいや。頑張れよ。これから、もつとしんどくなるぜ」

「……はあ」

わたしは疑問符を抱えて朝霞を見る。わたしを立たせた朝霞は、黒いＴシャツをなびかせながらクラスに戻った。

真唯ちゃんがゴミ袋ジャンプをしながらこちらに跳んでくる。上手いものだ。わたしはまた、溜め息をついた。上

教室に戻って、わたしは困惑してしまった。制服がない。一緒に置いていった真唯ちゃんのバッグはあるのに、私のだけなくなっていた。

「自分のロッカーには？」

真唯ちゃんの質問に、私は首を振る。

ロッカーはおろかゴミ箱にも、掃除用具入れの中にも、私のバッグはない。教室にはどこにもなかった。

「……どこに行っちゃったんだろ……」

そう呟くしかない。

「あずのファンが持っていたんじゃない？」

真唯ちゃんが元気付けようとしてカラカラと笑うのに、私は苦笑を見せた。

「ファンが持つて行った」のはなくても、

「誰かに隠された」ことは有り得る。

でも……、

誰かに隠された、なんて考えたくもない。隠されたということは、

私がいじめられているとも言えるわけだ。人から恨まれるようなことなんて、何一つしてないじゃないか……。
思い、私はハタと思考を止める。

あつた。

心当たりが。

『…………お前、何したか分かってんのか!』

東山。もしかしたらあいつらは、私に言われたことをまだ根に持っているのだろうか？ あれはどちらかといえば東山たちの方が悪いのに。

仕方がないので私はその後の授業を体操服のままで受けることにした。この学校は制服で授業を受けることが校則で義務付けられているから、クラスメートからも、もちろん先生からも理由をただされる。

その度に私は『手洗い場で制服を濡らしてしまった』と、なんとも苦しい言い訳をしなければならなかったし、制服の中に一人だけ体操服というのもなかなか惨めなものだ。

「そう言えば水野、さっき春日井が放課後生徒会室に来いって言うてたぞ」

本日3度目の言い訳を繰り返した私は、担任のその言葉に思わず

硬直した。

何ということだろう。今でも十分すぎるほど惨めなのに、それに追い打ちをかけられるに違いない。

今日は厄日だろうか……？私は半ば本気でお払いに行こうかと考えた。

「失礼します」

軽い会釈だけをして生徒会室に入ると、其処にいたのは生徒会長・春日井廉士ただ一人だった。彼は窓枠に腰をかけ、中学生の、それも男子とは思えないほどの優雅さを全身から醸し出して読書をしている。

いい気なもんだと心中で皮肉を言うことも忘れ、見惚れてしまった。

「どうしたの？ 入ってきていいよ」

優しい声音で促した彼は、自身も窓枠から離れ、机の上に置いてあった紙袋を手にもこちらへ近づいてきた。

思わずあとずさってしまったことを気にもかけずに春日井はその紙袋を私の目の前に差し出すと、笑みを見せた。

「あの……？」

「生徒会室の前に落とし物を入れる箱があるのは知っている？ そこに入っていたんだよ」

彼の言葉、袋の中を見れば、征辰の制服が入っている。慌てて取り出したブレザーの右胸には、

「1年5組 水野梓」の文字が刻まれた、ネームプレートがついていた。

「ずいぶん大きな落とし物だね？」

「あ、あの、有り難うございますっ」

「礼なら僕ではなくて拾ってくれた人に。 と言っても、それが誰なのかが分からないのだけどね」

肩をすくめてみせる春日井は、思っていたよりずっと親しみやすく『いい人』なのかもしれない。

「そういえば、リボンだけど」

「はい？」

「リボンだけ、一緒に入っていなかったんだ。無いと不便だろうから、生徒会室にあったのをに入れておいたよ。……役員用のだから一般生徒のものとは色が違ってしまっけれど、我慢してね」

この学校では生徒会役員、つまり武将達はそれぞれ青いネクタイとリボンをつけることになっているようだ。ちなみに一般生徒はえんじである。

後々リボンが見つかると思えず、ゲームに参加していると見られるのも癪だったけれど、そうも言っていられない。

「リボンが見つかり次第必ずお返しします」

「返さなくても良いよ。それ、在庫だし」

にこりと笑まれるが、はいそうですかと聞くわけにもいくまい。

いかにもクセのありそうな武将たちを抑えて、生徒会長の座に君臨している男だ。きっとこの柔らかスマイルの下では色々と思ひこを考えているに違いない。

私は丁重にお断りして、生徒会室を出ようと会釈をした。

「ねえ、梓ちゃん」

「はい？」

「君は体育祭、何に出るの？」

「障害物競走、ですけど」

「何レース目？」

「3レース目、だったと思いますけど……。それが何か？」

突拍子もない質問に首を傾げると、何でもないと爽やかに答え、春日井は私に手を差し出した。

「頑張つてね。応援しているよ」

つられて握手を交わすと、春日井はこれまで以上の笑顔になる。
その無敵スマイルと彼の手のひんやりとした感触に思わず赤面して
しまったのを誤魔化すように、私も曖昧にはにかんだ。

第3週 1 - 1

第3週

1

体育祭当日、長縄の朝練の為にいつもより早く家を出たが、校庭には既に多数の生徒の姿があった。

防球ネットには学級旗ならぬ派閥旗が掲げられ、校庭の其処かしこでは騎馬戦の練習に熱を上げる派閥も見受けられた。

「あーずっ！ おはよう！」

「お、真唯ちゃんだ！ おはよ」

手を振って駆け寄ってくる真唯ちゃんは、どうやら体育祭スタイルのようで、いつもは肩口に流している髪を二つ結びにしている。

「今日も可愛いね」

「ありがと。あずは髪、結ばないの？」

「んー、結ぶつもりだったんだけど、ピン忘れて来ちゃって。あたし髪が短いから、ピンがないと遅れ毛が出ちゃうんだよねえ」

肩をすくめて見せると、真唯ちゃんはカバンの中をこそこそとやりだした。

何？と覗き込めば、目の前にヘアピンを突き出された。

「はい、貸したげる。まだうちのクラス揃ってないみたいだし、今結びに行こ」

「ほんと？ ありがとーっ！」

ぎゅと抱きつく。真唯ちゃんは大笑だなあと笑うけれど、彼女のこういう気遣いは本当に嬉しいのだ。

並んで歩き出すと、とりどりの派閥旗が目に入ってくる。『絶対優勝！』や『風になれ！』などという爽やかなものに混じって、黒い生地に赤抜きの文字で『天上下唯我独尊』と書きなぐられた奇妙なものまである。

思わず笑ってしまいそうになった折、その旗の下で談笑する朝霞大翔の姿が目に入ってきた。確かに、あの人の派閥にはお似合いだ。

それにしても、普段は仏頂面がトレードマークのような人なのに、同じ派閥の人とはあんなに楽しげに会話するのか、と思うと、何だか妙な心地がした。珍獣を見た時というのは、こんな気分なのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8719b/>

市立征辰中学校戦国サバイバルゲーム！

2010年10月9日22時48分発行